

地域で家庭教育を支える活動

子育ての先輩が地域に支援のネットワークと循環を作る 二つの活動紹介

地域社会の関係が希薄になってきていると言われていた現代。頑張っている子育てをしているけれど、自分の子育ては正しいのか自信が持てないなど不安や悩みがあっても誰に相談したらいいのか分からず困っていませんか？そんな方に伝えたいのは、「周囲の人とつながること」です。子育ての経験者から話を聞く、子育て仲間と気持ちを分かち合うなど、力を借りて助けてもらうことで、安心できることも多いでしょう。問題を抱えている時でも、専門家への相談につなげてくれるような周囲の関わりが助けになります。また、子供もいろいろな人との関わりの中で育ちます。

「乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト」では、地域で家庭教育を支援する取組が、地域に合う様々な形で各地に広がることを事業の柱の一つにしています。地域ではどんな支援が可能でしょうか？どんな支援のカタチがあるでしょうか？ここでは、二つの活動の事例を紹介します。

事例1 「すべて・ころんで・ひと皮むけよう！」バナナの親子族(稲城市)

平成13(2001)年に稲城市の公民館の育児講座を受講した子育て中のメンバーが、「もっと子育てについて勉強したい」「活動することがリフレッシュになる」と、自分たちで講座を企画し市民企画講座を実施したことがきっかけで発足した「バナナの親子族」。子育ての少しだけ先輩としてできることがあるのでは？という思いで、「肩の力を抜いて泣いたり笑ったりしながら、真面目に子育てについて学び考える」活動を続けています。

現在の会員は、乳児から高校生の子育て中の母親が20名弱。気軽に子育てのことを話せる「おしゃべり広場」を中心に、講師を招いて話し合う講座や、会報の発行など、月2回程度の活動をしています。会員のみなさんにお話を聞きました。



● ユニークな会の名前に込めた思い

発足前のメンバーの気持ちは「子育てはもっと楽しいものだと思っていたのに、なぜこんなにモヤモヤ、イライラするんだろう。育児の本を読んでもその通りにはできないし……」「外に出たい！誰かと話をしたい！」というものでした。講座に参加して、考えたり、反省したり、これでいいんだと思えたり、色々な思いがあり、親も「すべてころんでひと皮むける」という意味で、「バナナの親子族」と名付けました。

会の目的を真面目に言うと、「親自身が育ち子供も大切に生活を考える」「地域を知り子育ての環境について考える」こと。柔らかく言い替えると「とにかく子育て中の人同士でおしゃべりして発散したり、ホッとしたり、時には泣いたりしてみる」「時には子供と離れてみる」ことを大切にしています。

● 一人で抱え込むことはつらいから、みんなでしゃべりましょう！

子育てをしていると、自分と向き合ったり、子供との向き合い方で悩む時があります。それを一人で抱え込むことはとてもつらい。だから気持ちを出し合う場が大切なのです。カナダの子育てプログラムを参考に「毎回、テーマを決めておしゃべりする」「おしゃべりの中で出たことはその活動の中だけで、他言はもちろん、外ではその話をしない」「聞いてるだけで、おしゃべりしなくてもいい」等のルールを決めて安心しておしゃべりができる環境を作っています。

会に参加するまでは知り合いもなく子供と家の中に二人きりでとても辛かったけれど、おしゃべり広場に参加して気持ちを吐き出したら、不安や悩みも笑って話せるようになったというメンバーもいます。共感してもらえる気持ちが楽になりますから、みんなで肩の力を抜いておしゃべりするのがいいのです。子育てのちょっとした悩みや不安を話せる場の大切さを実感しています。

● 子育てを通して関わり合うことで、親も子供も成長する

何も無いところから始めた私たちバナナの親子族には、イベントに参加するだけのお客さまメンバーはいません。みんなが参加者であり、活動内容や、講師を招く時のテーマもみんなで決めます。また、お互いに子供が小さな頃から知っているの、「大きくなったね！」「こんなことができるようになったんだね！」と、子供の成長を喜び合っています。自分の子供の良いところをメンバーに教えてもらうこともありますし、メンバーに褒めてもらって子



供も自信がつくようです。他人の子供は褒めやすいですからお互い様です(笑)。人との関わり方は、人と接して試行錯誤しながら身につくものですから、子供にはいろいろな人との関わりの中で育てて欲しいと思います。バナナの親子族の活動中は、公民館保育を利用して、未就園(6カ月～)の子供は公民館の保育室で過ごします。バナナの親子族には異年齢の子供が集まるので、保育室では、異年齢の関わり合いの中で少し年上の子の真似をして子供も成長するという良さもあります。

● 子育ての、少しだけ先輩の想い ～ネットではわからない、温もりのあるつきあいを～

私たちがまだ子育ての真っ最中で、小学生や思春期になる子供のことで悩みは尽きないのですが、少しだけ先輩の親として何ができるかな？と考えながら活動を続けています。今の新米のママ・パパも、子供と二人きりの生活の中で「外に出たい」「誰かと話したい」と思っているだろうと思います。パソコンや携帯電話が普及して便利になり、ネット上にも子育てのコミュニティーがたくさんありますが、やはり人間は出会って触れあって、体温を感じる関わり合いの中で成長していくのだと思います。もちろん子供も。子育ての成果はすぐには表れないし、親もすぐには達成感を得ることはできませんが、バナナの親子族は、これからも「膝をつき合わせて子育てのことを話す」ことを大切に活動をしていこうと思います。

事例2 「いろいろな人や団体が、いれかわり・たちかわり、地域の子育てに関わる」 子育て・いれかわりたちかわり実行委員会(立川市)

「子育て・いれかわりたちかわり実行委員会(通称「いれたち」)」は、平成16年、立川市が子供に関する総合計画「夢育て・たちかわ子ども21プラン」を策定する際に、協働する市民として集まった子育て当事者や子育て支援をしている人たちが、市民・団体・事業者・行政の横のつながり(ネットワーク)を作り、立川を「子育てを楽しみ感じられる町」にすることを目標として活動を始めました。平成18年からは、市とパートナーシップ協定を結んで活動を進めています。



● 活動は地域の行政や団体、事業者の協働で

発足の翌年にホームページ「いれたち・ねっと」を開設し、イベントのお知らせやサークルの紹介など、市内の子育てに関する情報の提供を始めました。また、子ども家庭支援センターなど行政や、駅前の百貨店、団地のショッピングモール、UR都市機構など、様々な団体と協働して、子育てに関する講座やイベントなどの事業を実施し、学びの場の提供や子育てのリフレッシュ、地域に子育てを通じた知り合いを増やすことに取り組んできました。

● 大盛況の「シネマのたまてばこ」

目玉イベントの一つは、赤ちゃんと一緒に映画館で映画を観る機会を提供する「シネマのたまてばこ」です。立川駅前の老舗映画館「立川シネマシティ」との協働で企画し開催しています。立川市は市民団体との協働事業としてこのイベントを共催しています。

「赤ちゃんと一緒に映画館で映画を観られたらいいよね」という素朴な願いから事業の企画が始まり、映画館に働きかけ、構想から3年後の平成19年に第1回を開催。その後も協働を続けて毎年1回実施し、平成25年で7回目の開催になりました。公募で集まった子育て中の親が「シネマのたまてばこ★2013実行委員会」(通称「シネママ」)を組織し、広報活動や上映する作品選び、当日の運営等のすべてを担います。先輩ママの「いれたち」メンバーは、シネママの若い感性や特技が生かされた企画になるようバックアップします。「活動を通して知り合いを増やしたい」「昨年実行委員をやって達成感・充実感があった」「引越してきたけれど東京のことは全然わからない」と話していたシネママたちですが、活動に参加してたくさんの知り合いができたようです。

映画会当日は秋晴れのさわやかな日。上映作品は、人気俳優の出演と家族をテーマにした内容、カンヌ映画祭での受賞作品とあって、チケットは早々に完売しています。

実行委員のみなさんは、おそろいのスタッフTシャツを着て、会場の飾りつけや「もぎり」、会場の整理など元気に動きます。館内ロビーにはおむつ替えコーナーやバギー預かり所、お手製のハロウィンの壁紙をバックに親子で記念写真を撮るコーナーも設置されました。場内では、お母さんがトイレに行く間、赤ちゃんを預かったり、カメラのシャッターを押したりするサポートも。赤ちゃんを抱いた親の気持ちを汲んだ細かな配慮には、積み重ねられた経験が生きています。

来場者は大人149名と赤ちゃん133名、お父さんが一緒に家族も8組いました。「家のテレビで映画を見ても集中できないけれど今日は本当に楽しめました」「カンヌ受賞作をいいタイミングで見られてよかった！」「号泣しました」などの感想が聞かれました。みなさん、



乳幼児期からの家庭教育を支援する

久しぶりの大スクリーンでの映画を堪能したようで、イベントは大成功！シネママ、シネママOB、いれたちメンバー、サポートメンバー、スタッフのみなさんも一つのイベントをやりきった笑顔です。

● 地域に広げる支援のネットワークと、 続いていく支援のつながり

「シネマのたまてばこ」の開催には、市内の子育て支援NPOのメンバーや、シネマシティの社員、市の子育て推進課、子ども家庭支援センター、子育てひろばの職員等、多様な協力者や関係者が参画しています。この横のつながりを作り、多くの人や団体が支援に関わることが、「いれたち」の目標につながります。

また、「『シネマのたまてばこ』は、チケットを購入した方も含めてみんなで作り上げるイベントです。実行委員会は映画を見る機会を提供し、手助けはしますが、パパ・ママも“お客さま”ではなく参加者です」と、代表の山中ゆう子さんは言います。「必要だ・問題だと感じたら自分で動くこと！」とは、山中さんが活動で心がけていることです。支援やサービスを受けるだけでなく、地域のことを自分のこととして動きはじめて、次の世代を支援する担い手になってくれることを期待しています。

シネママの一人は「最初は見ると側で参加したので、今度は企画する側になりたい」と思ったそうです。映画を観に来た人が実行委員をやってみようかなと思ひ、自分で動き始める。実行委員を経験した人は、少し前の自分のように子育てを頑張っている親子をサポートする、そのような支援の縦のつながりも形になりつつあります。



地域の、子育ての少し先輩が次の世代を支援する

「バナナの親子族」さんも「子育て・いれかわりたちかわり実行委員会」さんも、同じ地域の子育ての少し先輩が、今子育て中の親を支える活動に取り組みながら支援のネットワークを広げています。横につながって広がり、縦に次の世代に続いていく、そんな地域での支援のカタチが見えてきます。

子育て
トピック

★ 小さい頃に ★

P3で紹介している「スライド教材Ⅲ」に、関連するスライドや詳しい解説があります

遊んで動いて、スポーツの基礎が育つ！

2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることが決定しました。トップアスリートの活躍を間近に見られることが楽しみです。

ところで、世界の舞台で活躍する日本人スポーツ選手は、どうやって強く、早く、うまくなったのでしょうか？ 陸上、テニス、フィギュアスケートなどの日本人のトップアスリートが幼少年期にどのような運動の経験をしていたのかを調査した研究(※)によると、調査した選手・元選手の半数以上が一日2～3時間遊んで、その内容は屋外の遊びが中心だったそうです。また、約3割は、専門とする種目と並行して別のスポーツを経験していました。(※中村和彦他「トップアスリートの幼少年期における運動・スポーツ経験」平成23年)

乳幼児期は神経系の発達著しいので、歩く、走る、回る、跳ぶ、投げる、蹴るなど様々な基本的な動きを経験し、身に付けることに最も適した時期です。子供たちが夢中になるような楽しい遊びを通していろいろな動きを経験させてあげてください。いろいろな基本的な動きが身に付き、スムーズに動けるようになると、やがて動きを組み合わせ、生活に必要な動作やスポーツの難しい動きができるようになります。

3ページで紹介している指導用スライド教材Ⅲ「運動能力の発達と『遊び』の大切さ ～運動遊びを通して育つもの～」の指導の手引には、更に詳しい説明があります。こちらのウェブサイト内の「資料のページ」から御覧ください。

「乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト」ウェブサイト
<http://www.nyuyoji-kyoiku-tokyo.jp/>

